

比較思想学会第 51 回大会が本学で開催

金子 昭

6月28日・29日の両日、天理大学2号棟を会場に、比較思想学会（会長＝中島隆博東京大学東洋文化研究所長）が第51回大会（天理大学大会）を開催した。比較思想学会は1974年に創設され、広く哲学や文化や宗教などを相互に比較し、学際的に探究することを目指す学会である。我が国の比較思想研究の草分け的存在である中村元東京大学名誉教授が初代会長を務め、以来半世紀にわたって学術的な活動を展開してきた。

今回の天理大学大会では、島田勝巳副学長が大会実行委員長を務め、私は大会責任者を担当した。両日も午前中に10本の個人研究発表が行われ、午後には「宗教文化と比較思想」及び「聖地の思想」という2つの公開シンポジウムが開かれた。シンポジウムの部では、会員や一般の参加者のほか、本学の学生も多数参加して熱心に聴講した。2日間の参加者実数は190名以上に上った。

1日目のシンポジウム「宗教文化と比較思想」では、本学の東馬場郁生人文学部宗教学科教授が「きりしたん受容史から見えてくる宗教文化と比較思想の課題」について基調講演を行った。東馬場教授は、最新の比較宗教学の知見を紹介した後、きりしたん受容を事例に宗教文化の比較研究の課題を提示し、その上で比較思想の方法論について論じた。それを受け、頼住光子駒沢大学教授が「三輪山神婚譚をめぐる比較思想的考察」について、また酒井真道関西大学教授が「インド仏教における対話—その意味理解と位置づけ—」について、それぞれパネリスト発題を行い、その後、参加者を交えてパネルディスカッションを行った。私はコーディネーターを担当した。

2日目のシンポジウム「聖地の思想」では、パネリストとして3名の研究者が登壇。加藤みち子武蔵野大学特任教授が「聖地としての紀伊半島」について、中山郁皇學館大学教授が「聖地を拓くということ」について、そして本学の岡田正彦宗教学科教授が「宗教都市・天理と『ちば』」について、それぞれパネリスト発題を行った。岡田教授は、聖地「ちば」が天理教において人間創造の元の地点として独自の意義を有することを紹介し、天理という宗教都市がどのように形成されてきたかについてスライドを用いながら説明した。その後、参加者を交えて質疑応答が行われた。コーディネーターは、板東洋介東京大学准教授が務めた。

天理台湾学会第 33 回研究大会が本学で開催

金子 昭

7月6日、天理大学研究棟第一会議室を会場に、天理台湾学会（会長＝山本和行国際学部中国学科教授）が第33回研究大会を開催した。同学会は、1991年、天理台湾研究会の名称で発足し、天理大学に事務局を置く国際的な学会で、例年、天理大学を会場に研究大会を開いている。今回は台湾からの参加者を含め、研究者や学生ら約40名近くが参加した。

研究発表の部では、4名の研究者（内3名は台湾から参加）が発表した。その内、本学からは中国学科の今井淳雄准教授が「0403花蓮震災をめぐる日本の支援活動」と題して発表、今年4月に発

生した花蓮震災をめぐる日本の公的機関による支援活動について詳しい報告を行い、その際、私がコメンテーターを務めた。

講演の部では、三濱善朗元天理教台湾伝道庁長が、「戦後の天理教台湾伝道史を振り返って—その歩みと今後の展望を語る—」と題して記念講演を行った。三濱元庁長は、戦後初めて台湾伝道庁長として赴任した時の体験や現地の信者の歩みについて語り、また天理大学が学術交流を通じて果たしてきた役割についても強調した。

第 6 回 EASSSR（東アジア宗教科学研究会）年次大会に参加

堀内みどり

標記大会が7月6日から8日にかけて麗澤大学を会場に開催された。本年度のテーマは「Religion and Morality in The Global East」（グローバル・イーストの宗教と道徳）だった。6日の基調講演は井上順孝國學院大学名誉教授による「Fragments of Confucian ethics in modern Japanese New Religions and Shinto（現代日本の新宗教と神道における儒教倫理の断片）」、7日の会長講演では櫻井義秀北海道大学教授が「Japan's Political Religion of Rent-Seeking: Changes in Politics and Religious Relations since the Murder of Former Prime Minister Shinzo Abe（日本の政教分離：安倍晋三元首相殺害事件以降の政治と宗教の関係の変化）」、また同日夕刻の基調講演ではAlan Cooperman氏（Pew Research Center）が「Levels of Religious Switching in East Asia: A Global Perspective（東アジアにおける宗教転換のレベル：グローバルな視点から）」と題して行った。8日は麗澤大学などの見学会があったが参加できなかった。発表者は、合計98人で、堀内は第2日目（7日）の第4セッションの1「East Asian New Religious Movements and the Harmonization of Tradition and Innovation（東アジアの新宗教運動と伝統と革新の調和）」のパネルで、「Religion and women in contemporary Japanese society: Has Tenrikyo guided women?（現代日本社会における宗教と女性：天理教は女性を導いてきたか?）」をテーマに発題した。

International Conference on Indian Diaspora in Asia（アジアにおける印僑についての国際会議）に参加

堀内みどり

標記国際会議が7月18日・19日に、タイ・バンコクのMahidol大学で行われた。印僑は世界最大級の規模を誇り、特にアジアでは歴史的、文化的、社会学的、政治的、経済的に重要な位置を占めてきており、種々の世界変動にあってさえ、印僑という概念は、現代アジアに関する新たな学問の中で際立っている。そうした認識のもと、この会議は、印僑研究に関心を持つ研究者が一堂に会し、歴史、歴史学、政治学、国際関係学、言語・文学、芸術・文化遺産における彼らの影響と表現について議論することを目的として開催された。日本からは4名の参加者があった。堀内は、「East Asia」のパネルで、「New Indian Society in Japan: Indian Involvement in Contemporary Japan as Seen in the Activities of the "Edogawa Indian Association"」と題して発表した。発表者は約60名で、会議運営における学生の活躍が目立った。

グローバル天理

第25巻 第10号（通巻298号）

2024年（令和6年）10月1日発行

© Oyasato Institute for the Study of Religion
Tenri University

発行者 井上昭洋

編集発行 天理大学 おやさと研究所

〒632-8510 奈良県天理市杣之内町1050

TEL 0743-63-9080

FAX 0743-63-7255

URL <https://www.tenri-u.ac.jp/oyaken/index.html>E-mail oyaken@sta.tenri-u.ac.jp

おやさと研究所（HP）



印刷 天理時報社

Printed in Japan